

# 『ひらかな盛衰記』について

## 「源平盛衰記」の影響とその独創性

長野 由佳

近世において数多くの「浄瑠璃」が生まれたが、その中の一つ「ひらかな盛衰記」は、文耕堂、三好松洛、浅田可啓、竹田小出雲、千載軒によって創られた合作浄瑠璃である。本作品は時代物浄瑠璃として五段から成り、鎌倉中期の軍記物語「平家物語」を増補改訂した異本の一つ「源平盛衰記」にその素材を仰いでいる。そして、その中でも、特に「木曾義仲討罰」から「一谷合戦」までを中心にして構成された作品である。

本作品のような合作浄瑠璃には複数の作者が存在するが、各自の担当した段が全く別々の趣向を持つのではなく、常に立作者の創作意図を柱に全体的にまとまりを持って作品化されると思われる。その点を考慮し本作品を見るならば、紀海音、竹田出雲、並木宗輔らと共に『作者の四天王』と称され、筋立頓作の名人と評価された文耕堂が立作者であるこの作品は、彼のそのような個性を反映して、筋立等任何らかの創意工夫がなされていても不思議ではない。

そこで、本作品を原典となった「源平盛衰記」と比較・

考察していくことによって、双方の相関関係、つまり「ひらかな盛衰記」がどこまで「源平盛衰記」の忠実な浄瑠璃化であるかを探ると共に、もし相違する部分が存在するならば、その独創性とは一体どのようなものなのかを考察していきたいと思う。

### 第一章 登場人物の役割、設定比較

まず「ひらかな盛衰記」第一段は、表より明らかなるに「源平盛衰記」のそれとほぼ同じである。(表1参照)  
ただし注目すべき点は、それらに、山吹御前、腰元お筆、駒若という女性、子供の登場人物が加えられている点である。この三人は夫や父、あるいは主君の立場にあった木曾義仲の失墜によって戦乱にまきこまれ、それぞれが悲運を辿ることになるが、男達が戦乱の表舞台に立つ陰で、それに翻弄されていた多くの女性、子供達の声にならない叫びの代弁者としてこの三人の登場人物が作中織りこまれていくことで、その悲哀性が強調されているように思われる。

ともすると隠れがちな違った意味での戦の犠牲者の悲哀を決しておおざなりにせず、むしろ積極的に掘りおこし作品に強くうち出していくのが、三人の果たす役割ではなからうか。つまり、戦乱の表舞台に立った武士に焦点をあてた流れとは異なる方向性を、この「ひらかな盛衰記」に与えているのである。

また、共通の登場人物でも、木曾義仲、梶原景時は、「ひらかな盛衰記」においては全く異なる描かれ方をしている。義仲の場合は愛国心に燃えた肯定すべき善玉、景時の場合は徹底した悪玉として登場している。作中の人物描写から明らかのように、兩人共、従来とは異なる新たな役割を「ひらかな盛衰記」では担わされているわけだが、これは、この時期の浄瑠璃によく見られる趣向の一つ、つまり、観客をあっと驚かせる筋立のおもしろさ、あるいは新鮮味を与えたり、いわゆる作中の理想的登場人物をよりひき立たせるためのワキ役（悪玉）の設定であったと思われる。

続いて第二段以降であるが、表2からも明らかのように登場人物ががらりと様変わりする。（表2参照）しかも、加えられた人物の大部分が武士ではなく、庶民であることに注目したい。つまり、この「ひらかな盛衰記」は、積極的には武士ではない階層の人々を登場させ、それらを武士達と巧みにからませて、個々人の人間味をうまく描き出しているのである。これは、題材を『源平の戦』に求めながらも、市井の人々にも目を向けた「ひらかな盛衰記」の新たな指

向の現れではないかと思われる。

その中でも、特に船頭権四郎、腰元千鳥は重きをおいて描かれており、それぞれ第三・四段の中心人物の一人となっている。権四郎は、義仲の遺児駒若の身がわりとなつた孫を失い、千鳥は、父の敵の子である梶原景季との恋に葛藤する。双方共、義理を押し通すことで、人間として当然の情けである愛情が絶たれたり、あるいは押しつぶされそうになるわけで、その根本的性格を『悲哀』としていた浄瑠璃の悲愁性を十分に表現し得る人物であるし、肉親・男女の愛という人間らしい題材をこのような形でからませていくことで、当時の人々には全く遠い世界でしかなかった『武士の世界』というものを、「ひらかな盛衰記」は多少なりとも身近な世界へと転化させているといえよう。

また、第三・五段の中心人物を樋口兼光とし、主君義仲の仇を討つべく、あらゆる苦難をものりこえ、最期は自ら死を選んでいく彼の姿を通して、勇敢・義理堅さ、潔さ等の理想的な武士道の要素を描き出している点、あるいは第二段で、父景時の命の恩人である佐々木高綱に対する感謝の念から、宇治川先陣の榮譽を意図的に譲つた梶原景季の律義さを表現している点は、原点「源平盛衰記」とは異なる人物設定によって、「ひらかな盛衰記」独自の世界を創り出しているといえよう。

## 第二章 内容展開についての比較

第一章で述べたように、登場人物に関しては新たな登場

人物が加えられたり、あるいは同じ登場人物でも異なる描かれ方であったり、必ずしも、典拠である「源平盛衰記」には忠実ではないことが明らかになった。しかし、そのように作品中の登場人物に工夫が加えられているならば、それらの織りなす内容展開というものにも必然的に何らかの変化が生じているはずである。そこで、次は、内容展開の方向から「ひらかな盛衰記」を探っていくと、全体的な比較は表3のようになる。(表3参照)

表3より明らかな通り、「ひらかな盛衰記」の内容展開は、「源平盛衰記」から影響を受けている部分と、全く「ひらかな盛衰記」独自の部分とが共存しているわけで、必ずしも内容展開が全て「源平盛衰記」に忠実ではないことが理解できる。

しかも、表3の①から⑤で示した共通題材を扱っている部分もまた、双方を細かく比較考察していくと、何らかの形で手が増えられたり、あるいは全く異なる展開に改作されていることがわかる。(それぞれの詳しい比較は枚数上省略)

つまり、内容展開においても、「ひらかな盛衰記」は「源平盛衰記」にとらわれることなく、完全な創作部分、または、「源平盛衰記」から題材を得ながらも、多かれ少なかれ何らかの形で手が増えた部分を巧みに織りあわせていくことで、自由な、「ひらかな盛衰記」独自の流れを生み出しているといえよう。

### 第三章 「平家物語」との比較・考察

以上、第一・二章で、「源平盛衰記」・「ひらかな盛衰記」の二作品を、登場人物・内容展開の面から比較・考察したが、これに「平家物語」を加えて、三作品の関連性まで枠を広げて考察したいと思う。そもそも、「平家物語」は軍記物語の最高峰とされ、「源平盛衰記」自体そこから派生した一異本であるので、「ひらかな盛衰記」の作者達が「平家物語」に関する知識、あるいは教養といったものを身につけていたと考えると、さほど不思議はない。むしろ、それらを一切持たず増補本である「源平盛衰記」だけに終始して本作品を創作したとする方が不自然である。

そして、この点は、「源平盛衰記」には見られず、「平家物語」と「ひらかな盛衰記」に共通する人物の存在から明らかにすることができる。第一章において述べた「山吹」である。「平家物語」での山吹についての記述は非常に少なく、『木曾殿は信濃より巴・山吹とて、二人の便女をぐせられたり。山吹はいたはりあって、都にとどまりぬ』(平家物語・巻九・木曾殿最期)という部分のみで全く影がうすい。その点、作品中での役割というものが、「ひらかな盛衰記」とは全く異質ではあるが、しかしながら、少なくとも「ひらかな盛衰記」が「平家物語」をもふまえた上で作品化されているということを、この山吹という登場人物を通して理解することができるのである。

そこで、「源平盛衰記」「ひらかな盛衰記」に「平家物

語」を加え、登場人物・内容展開の二面から、その相関関係を考察すると、表4・5のようになる。(表4・5参照)

まず表4から明らかなように、「ひらかな盛衰記」が「源平盛衰記」から取り入れた人物は、全て「平家物語」にも共通して見られるもので、かなり、その存在の有名な人物ばかりであることがいえると思う。また表5の内容展開に關してであるが、「源平盛衰記」と「ひらかな盛衰記」に共通している①から⑤の題材のうち、③から⑤については、「平家物語」の中でも同様に扱われている。また特に、⑤の『簾の梅』については、世阿弥によって『簾梅』として謡曲にもなっている。

つまり、「ひらかな盛衰記」は、無秩序的に「源平盛衰記」に依拠しているのではなく、「平家物語」にも同じように登場する人物・題材、あるいは謡曲のような他分野の作品にとり上げられている、いわば、かなり固定化した人物・題材をおおよそふまえた上で、作品中に生かしているといえるのである。前述の如く、「源平盛衰記」は「平家物語」を基盤にした増補本であるため、それに比べて増加部分のかなりある作品であるが、そのような後に付加された部分つまり、「源平盛衰記」独自の余り定着していない一過性の人物、題材のみを取り上げて、「ひらかな盛衰記」が作られているのではなく、どちらかというところ、複数の人々になりに知られた確実性のある人物、題材を重視して、意識的に取り入れているのである。そして、その上で必要に応じ、適宜「源平盛衰記」の増補部分をも参考にしたと考えられ

るのである。

そういった意味では、あくまでも「源平盛衰記」に依拠しながらも、「ひらかな盛衰記」は、人物や題材等の選定の段階で、「平家物語」からも、少なからず影響を受けているということができよう。

#### 第四章 結論

以上、本論において、「ひらかな盛衰記」を「源平盛衰記」と比較・考察してきた。

第一章の登場人物の役割、人物像についての比較では、「源平盛衰記」には無い人物の設定(山吹・権四郎・千鳥など)や、両作品に共通の登場人物であっても、全く新たな人物像に改作している例(木曾義仲・梶原景季・樋口兼光など)が見られた。

また、第二章の内容展開の比較においては、同題材を扱っている部分が表3の如く5ヶ所にすぎず、しかもそれらの部分に、多かれ少なかれ何らかの手が加えられており、展開上、完全に忠実な部分というものが無いことが明らかになった。

そして、「源平盛衰記」とは異なるこれらの部分、つまり、「ひらかな盛衰記」独自の創作部分は、それぞれが作品の中で重要な働きをなしていると思われる。木曾義仲や樋口兼光・梶原景季などの人物改作は、武士たるものに不可欠とされた、義理・忠義・あるいは潔さといった要素を如実に描き出し、山吹権四郎、千鳥といった架空の人物設定

は、たとえ表面に現れなくとも、戦乱の陰で犠牲になった多くの女性、子供、そして市井の人々の悲哀、愁嘆の世界を、「ひらかな盛衰記」に与えている。また、内容展開において、題材を「源平盛衰記」に仰ぎながらも、手を加えたり、全く異なる展開に改作している部分（射手明神・巴の粟津合戦・宇治川先陣・逆櫓・籠の梅）は、筋立に変化をもたせ、新鮮なおもしろみを提供するだけでなく、それぞれの場面に関連している登場人物の人間性というものを表現している。梶原景時の悪人ぶり、愛国心に燃えた木曾義仲の肯定すべき人物像、梶原景季の義理堅さや樋口兼光の一途なまでの孤忠、あるいは、千鳥の至純な愛、健気さといったものを、「ひらかな盛衰記」独自の展開の中で、巧みに描き出しているのである。

加えて第三章では、「源平盛衰記」の基盤である「平家物語」も交え、その関連性について考察したが、「源平盛衰記」には見られず、「平家物語」と「ひらかな盛衰記」に共通する人物『山吹』の存在から、「平家物語」からの影響というものが推察できた。さらにつきつめれば、「平家物語」における登場人物は、『山吹』を除けば「源平盛衰記」と全く同じであり、内容展開に関しては、「源平盛衰記」と「ひらかな盛衰記」の共通題材5ヶ所のうち、「宇治川先陣・逆櫓・籠の梅」の3ヶ所がやはり「平家物語」にも見られることから、少なからず「平家物語」との関連性ということも無視できないといえる。つまり、「ひらかな盛衰記」が「源平盛衰記」に登場人物や内容設定の上で依拠する際、

「平家物語」等にも取り上げてあり、比較的知られていたと思われるものは、形式的に網羅したと推察できる。そして、その上で、何らかの手を加えたり、全く改作したり、あるいは依拠することなく独自に創作したものとを組み合わせていくことで、「ひらかな盛衰記」固有の世界を生み出しているのである。

そして、そこに見られる独自性とは、義理や忠義をより強調しながら、それを守ることによって生じる悲哀、つまり、道義性重視のために肉親との絆の断絶、あるいは死の選択など、様々な形で人間性を圧迫されていった人々の悲愁性や、戦乱の陰で犠牲になった武士以外の多くの人々の愁嘆に焦点をあてている点ではなからうか。前述のように、登場人物の役割や設定・内容展開において、部分的には「源平盛衰記」に依拠しながらも、自由に創意工夫・換骨奪胎して、単なる「源平盛衰記」の焼き直しでは、およそ描き出すことのできなかつたであろう世界を展開しているのである。

つまり、「ひらかな盛衰記」は、忠実な「源平盛衰記」の浄瑠璃化とは言えず、むしろそこから脱脚して、武士だけではなく、中世の軍記物語では扱われることのない女性や子供、市井の人々にも視点を拡大して、義理や忠義、あるいは、それを重視することで生じる悲哀性といったものを柱にして成立した独創的作品であるといえよう。そういった意味で、「ひらかな盛衰記」は、「源平盛衰記」とは全く別の方向性を持つことで、完全に独立した一作品とし

て生まれかわったわけである。そして、単なる封建道徳（忠・義など）の礼讃に終わることなく、それを守ることによって起こる悲嘆や苦悩を、様々な階層の立場から拡大強調し、そこに深い感動を呼ぼうとすることこそが、「ひらかな盛衰記」の求めた世界であり、文学作品としての「源平盛衰記」とは異なる存在価値が、そこに見い出されるべきであろう。

参考文献

「浄瑠璃集」・上——ひらがな盛衰記

（岩波古典大系／岩波書店）

「平家物語」

「日本文学大系第十六巻——源平盛衰記」

（国民図書株式会社）

「文耕堂について」——近石泰秋氏著

（国語国文学研究・論考と資料 名古屋国語国文学会）

「最盛期とその後の浄瑠璃」——大久保忠国氏著

（岩波書店）

「日本文学大辞典」

「日本国語大辞典」

（新潮社）

（小学館）

付加（資料1～5）

表1 登場人物の比較（第一段）

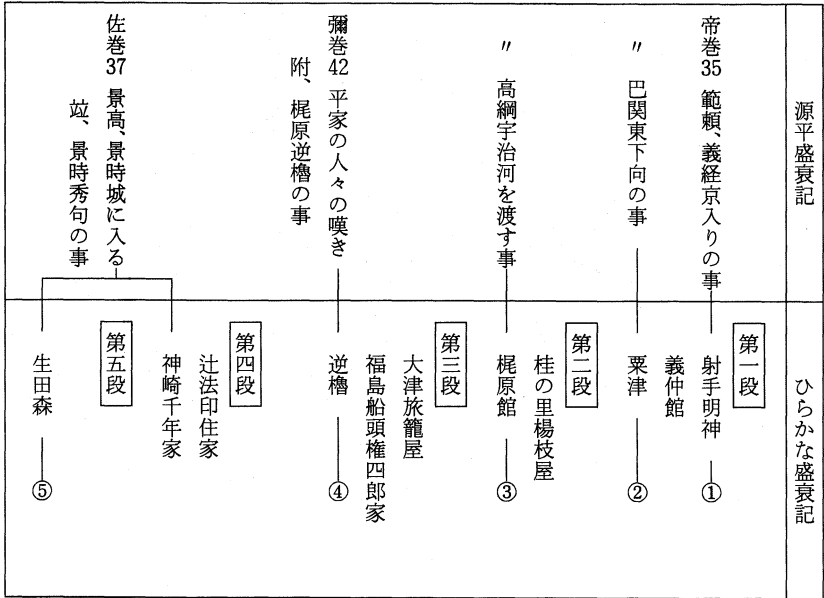
人物	源	人物	源
木曾義仲	○	和田義盛	○
源義経	○	巴御前	○
佐々木高綱	○	山吹御前	○
梶原景季	○	腰元お筆	○
畠山重忠	○	駒若	○

（注）「源」は「源平盛衰記」、「ひ」は「ひらがな盛衰記」の略

表2 登場人物の比較（第二段以降）

人物	源	人物	源
鎌田隼人	○	延寿	○
番場忠太	○	権四郎	○
梶原景季	○	およし	○
梶原景高	○	追松	○
千鳥（梅が枝）	○	樋口兼光	○

表3 内容展開の比較



は、「源平盛衰記」と「ひらかな盛衰記」に共通

表4 登場人物の比較

人物	平	源	ひ	人物	源	ひ
木曾義仲	○	○	○	鎌田隼人	○	○
源義経	○	○	○	番場忠太	○	○
佐々木高綱	○	○	○	梶原景季	○	○
梶原景季	○	○	○	梶原景高	○	○
畠山重忠	○	○	○	千鳥(梅が枝)	○	○
和田義盛	○	○	○	延寿	○	○
巴御前	○	○	○	権四郎	○	○
山吹御前	○	○	○	およし	○	○
腰元お筆	○	○	○	追松	○	○
駒若	○	○	○	樋口兼光	○	○

(注) 「平」は「平家物語」、「源」は「源平盛衰記」、「ひ」は「ひらかな盛衰記」の略

表 5 内容展開の比較

平家物語	源平盛衰記	ひらかな盛衰記
<p>卷9 宇治河先陣</p>	<p>高綱宇治河を渡す事</p>	<p>第二段 桂の里楊枝屋 梶原館</p>
<p>卷11 逆櫓</p>	<p>彌卷41 平家の人々の嘆き 附 梶原逆櫓の事</p>	<p>第三段 大津旅籠屋 福島船頭権四郎家 逆櫓</p>
<p>卷9 二度の懸 ただし、旅の梅 ついでに記述は 本系統のみ</p>	<p>佐卷37 景高・景時 城に入る 竝 景時秀句の事</p>	<p>第四段 辻法印住家 神崎千年家 第五段 生田森</p>

—— は「源平盛衰記」と「ひらかな盛衰記」のみに共通  
 —— は三作品ともに共通

